

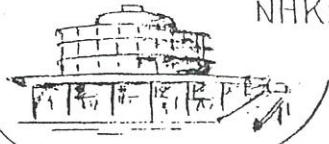
＝たまがわ沖5

第 10 号
行 任 者
務 局

昭和62年3月20日
木 武 一
川第五出張所
TEL. 700-9120



NHK放送技術研究所



世田谷市場



世田谷美術館



岡本民家園



靜嘉堂文庫



東京農業大学



長谷川美術館



五島美術館

ちよつとあしをのばしてみませんが



くらしの
カ
イ
ト

賀用上

ひろば・ア・ラ・カルト

初めて、ひろば、出す時は
作家気分で気取つたり
りきんでみたり気取つたり
アレコレ書いてみせました。
郷土紹介、道しるべ
勝手に書いた呂宋標
足かけ五年にちました。
メンバー顔を見合せて
管内みんな出尽した

賀用

瀬田

玉川

玉川台

此処でチョッ とひと巡り
ハミ出し記事で書きましょ
大根かついだ農人生
そびえる塔はNHK
今は技術の研究所
都立の世田谷^{アオイキバ}市場
そして世田谷美術館
静嘉堂から民家園
まだまだこれから

続けます。

多摩川

✿ “ひろば”ご希望の方は玉川第五出張所においてありますのでどうぞ。

覽回

静嘉堂文庫

三葉名会社の二代目社長、岩崎弥太郎とその息子小弥太により収集された東洋の古美術品は、国宝の源氏物語絵巻など有名ですが、毎年、春(3月~7月)・秋(10月~11月)に公開展示を行っています。

。名刀展 形々
。茶の心、歌の心展 形々
。鉄絵のやきもの展 形々

静かな住宅街にある、レンガ造りのモダンな建物。昭和60年に開館されました。

「ザザエさん」の原作者である、長谷川町子さんが館長の美術館です。

日本画、洋画、陶磁器等所蔵品が一定の期間ごとに展示されています。

長谷川町子美術館

「ザザエさん」展あり

長谷川町子作品展と現代作家による日本画展、さらには現代作家館蔵品展、さらには学校のお休みの日などは家族連れで来られる方が多いそうです。

桜新町 1の30の6
TEL 701-8766

(高橋通)

東京都中央卸売市場 世田谷市場

昭和47年3月、従来、在原市場の管轄であった世田谷、調布、玉川の三分場を整理統合して、市場の過密解消と、青果物の流通を円滑に行うために設置。敷地面積約2万2千坪、取扱品目、野菜、果実及びこれらの加工品。一日の入荷量約5百トン。売上金額約1億円。毎日6百人前後の八百

東京農業大学

明治24年、維新の英雄、榎本武揚によって麹町区飯田町に開校。同31年に渋谷常盤松に移り、第二次大戦後の昭和21年、現在地に移転。

毎年11月上旬に行なわれる「収穫祭」は農大秋の風物詩として親しまれ、特に植木、野菜の即売や、学生達のマイコン踊り有名。

校立 1の1の1
TEL 420-2131 (飯田)

岡本民家園

旧岡本家を再現した民家園は、世田谷の昔を知るためには、貴重な建物です。ただ古い建物として見るだけでなく、郷土に伝わる伝統行事にも参加してみませ

五島美術館

美術館は、昭和35年4月に開館されました。王朝風建物が、こぶしの木や湧水など自然と生かした庭園を含め、約6千坪の敷地内にあります。展覧会は年々八回、そのうち二回は特別展で、所蔵品を順に公開。厚さんが仕入れに参加します。場内見学は、団体のみ事前連絡あれば御案内しますとのこと。

大蔵 1の4の1
TEL 417 0131 (柳田)

わが国でラジオ放送が始まったのは昭和5年に開設され、放送技術に関する総合的な研究機関として唯一の施設です。

NHK 放送技術研究所

新しい情報化社会にあつて衛星放送を始めとした、ニューメディアの展開期を迎え、ハイビジョンシステムや、光ファイバー伝送など今後の放送技術の開発研究が注目されます。

敷地約1千7百坪、職員約350名。毎年6月には視聴者に施設が公開されます。

TEL 415-5111 (柳田)

世田谷美術館

今年の主な年間予定より、(一)常設展 当館所蔵の常設展示、年4回一部展示替え、(二)企画展

高山辰雄展 形々
白と黒の会展 形々
ヤンクンテンボリ展 形々
北大路魯山人展 形々
スティーヴンズ展 形々
世田谷美術館展 形々
(三)教育普及活動 創作コース、ワークショップコース、サマーセミナー、他

(四)美術大学・基本コース 年間28週 週2回5~3月、夜間コース年2回8月10月、(五)アートライブラリー 美術情報提供、相談その他、(六)催物 映画、ビデオ10回、演劇鑑賞等8回、講演会10回、アマチュアコンサート他4回、いづれも土日休日を中心とする。その他

TEL 415-6011 休館日 第2第4月曜 (柳田)

あともがき 回を重ね、ひろばも今回で10号、玉五(たまご)共和国の国内めぐりが一巡したところで、本号はちょっと異国散歩、おとなりの国々にも色々見所がありました。

一度、ご家族でお出かけを。バスホートは不要...。次号からは、また新しい視点で、私達のまちを考えていきたいと思います。

作図 鈴木聖子
筆耕 折原

(飯田)

